

第1回 SPARC Japan セミナー2017

「図書館員と研究者の新たな関係:研究データの管理と流通から考える」

全体議論



能勢 正仁	(京都大学大学院理学研究科)
倉田 敬子	(慶應義塾大学文学部)
大澤 剛士	(国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター)
西菌 由依	(鹿児島大学/JPCOAR 研究データタスクフォース)
片岡 朋子	(お茶の水女子大学/JPCOAR メタデータ普及タスクフォース)
武田 英明	(国立情報学研究所/研究データ利活用協議会)

●**能勢** ここから全体議論に移ります。Twitter でご参加されている方で、もし何か質問がある場合は受け付けますので、つぶやいてください。

図1は、最初に研究者への宿題という形でお願したテーマです。これについて聞く前に、5人の先生方に登壇してお話いただきましたが、これについても少し話を伺いたいことや質問はございませんか。

●**服部** SPARC Japan 事務局の服部です。「大学図書館が関わり得る余地があるか」について、大澤先生の資料にも、図書館員が研究プロジェクトに関わるといったものがありました(図2)、こういうものを組織として受けるのはまだ難しいと思うのです。どのぐ

らい業務量があるか分からない、図書館員は2~3年で別のところに異動するので、ちゃんと続けられるかどうか自信がないところがあると思うからです。そこで先生方にお尋ねしたいのが、個人で受けて異動したら「ごめんなさい」でも許されるのかどうかです。ご意見いただけますでしょうか。

●**大澤** まずその話は、リポジトリ、箱がどこにあるかということさえ担保されれば、異動はもう普通のことだと思います。若手・中堅ぐらいの研究者は異動するのが当たり前ですし、一つのプロジェクトの途中に2~3回異動するなんてことも当たり前ですが、そのテーマ自体は抱えていくわけです。例えばプロジェク

全体議論

研究者への質問

- 研究データリポジトリについて、
 - 研究者のニーズがどこにあるのか?
 - 大学図書館が関わりうる余地があるのか?
 - そもそも研究者は図書館は関わってほしいと思っているのか?

(図1)

こんなことできる?

研究プロジェクトのメンバーに

競争的資金でも、DMP (データ管理計画)の作成が求められつつある。データ管理者としてライブラリアンをメンバーにできないか?

→外部資金が配分され、リポジトリ維持とか業務に利用できる

(図2)

トに組織として関わるとすれば、どうなるか何とも言いにくいところがありますが、仮に個人レベルで関わるとしたら、それ自体はそんなに問題ではないという気がします。

ただし、所属する組織が替わったとき、研究者の場合は研究費を背負って来るので、研究者として異動する限りはそのプロジェクトをやめるということはないでしょうけれど、図書館員の場合はそうはいかない可能性が想像としてはあると思います。

●服部 例えば同じ大学の図書館の隣の係などでしたら、少しやれる余地があると思うのですが、特に国立大学では、隣の隣の県など、かなり大規模な異動があるので、そうすると仕事を続けるのが難しいと思います。そういうところで思い悩むよりも、先生方とぶつかって思い切ってやったほうがいいのかなど。

●大澤 今のはちょっと私の答えがずれていたと思ったのですが、例えばわれわれは農林水産省の委託プロジェクトのようなものによく関わります。その場合、われわれのような国立系のところは、所内での人事異動的な意味の異動はあまりないのですが、都道府県だと、次は普及所にいた行政の方が研究の担当になるということがよくあります。そのプロジェクトの期間内はずっとその県が参画しているけれど、担当が入れ替わることは比較的頻繁にあるということです。それで全てすんなりいっているとは言いませんが、比較的それでもとにかくプロジェクト自体は運営されるので、何とかなるのではないかという気はしています。

●服部 ありがとうございます。

●能勢 私は倉田先生に伺いたいのですが、今日ご紹介されたインタビューの結果は、少し年配の方を対象にされた結果だとおっしゃっていました。もう少し下の若い世代はどう考えているか、何かコメントはございますか。もう少し若い人だと違うとか。

●倉田 インタビュー対象者は、もちろん全員がいわゆるシニアではなく、助教クラスのお若い方にもお聞きしています。そのときに感じたのは、やはり若い方のほうが大変というか、少し余裕がないということですね。とてもそこまで思いが至らないのです。

お年を召したと言うのはちょっと失礼ですが、そういう方は、「自分がこれまで持っていたデータは、定年になったらどうなるのだろう」とすごく心配なさっています。自分の研究がどうこうというよりも、「このデータは絶対にその後使えると分かっている。けれども、自分の後進が、この大学の同じ研究室に教授として残ってやっていけるという保証はない。そうすると、このデータをどこに託せばいいのか、すごく心配だ」と言っていたことが大変印象に残っています。それと似たような話は他にも聞いたことがありますし、私自身も少しそう思います。

データリポジトリは、自然科学系では幾つか出てきていますし、社会科学系も東大のものなど幾つかありますが、全国の、誰でもすぐにデータをぱっと出せるというものはないのです。そうすると、自分が「これは結構使えるのではないか」と思っているデータでも、欧米の figshare や Dryad などに入れるしかなく、それでいいのかというのは、やはりすごく思うところがあります。

年齢は関係なく、データを蓄積して持つようになると、これはどうしたらいいのかという心配が出てくると思います。ただ、例えば今、私が「慶應の機関リポジトリにこのデータを入れますか」と言われたら、困ってしまうと思います。メディアセンターに「これ何とかして」と言っても、どうしようもないという話なので。

先ほど、図書館員の業務としてはなかなか難しいとおっしゃったのですが、そうすると逆に、すごく親切な図書館員に雑用を助けてもらうということしかできなくなって、それは少し違うだろうと思うので、私は業務としてきちんと道をつくってあげない限り、できないのではないかと思います。

●**武田** 今のお話は、シニアにはシニアの悩みがあって、若い人には若い人の悩みがあるという話で非常に面白かったです。シニアには、確かにリタイアしたときにデータはどうなるのかという問題があると思います。死ぬまで自分だけで抱きかかえたい人は別として、データを残していきたいという人たちに手だてを提供してあげることも、機関リポジトリなり、リポジトリのある種の役割だと思えます。

リタイアすると時間ができるので、きちんとキュレートできるような気もしますが、大学の機関リポジトリに「元教授はもう入れられません」と言われてしまうと困ります。だから、そこの感覚も「元スタッフだったら入れてもいいですよ」となると、これからは65歳過ぎたぐらいの方が頭も元気だし、時間もあると思うので、そういう方のエネルギーをうまく使ってデータの整備や公開もできるというのと今話を聞いていて思いました。

ちなみに今、多くの大学ではそういう運用はなされていないのではないかと思いますので、どうですかね。

●**能勢** そういう前例など、ご存じの方はいらっしゃいますか。

今、倉田先生と武田先生がおっしゃった話は、私の自然科学、宇宙科学の分野でも話題になったことがあります。税金を使って取ったデータで、貴重で、まだ使えるのに、その方が定年されると、公開したり保存したりする術がない。そのときは、学会で取ったデータなので、学会でそういう仕組みができないかという話になったのですが、それをやるにも費用がかかるので難しい。そうすると、大学の機関データリポジトリに登録できるといいのですが、今おっしゃったように、確かに定年されるとそこまで責任が持てないという話も出てくるかもしれません。でも、確かに定年でいっしょらなくなる先生のデータをどのように保管するのかというのは大切な話ではあります。

もう一つ、若い方のほうが余裕がないというのはあり得ることだと思いました。大澤先生もおっしゃって

いたように、本来の研究のほうで手いっぱいでもこまめで手が回らないということです。先ほど、「データを管理して公開していくのは当然だ」という形で、若い人へのリサーチデータ・マネジメントの教育に使えるという話がありました。これは非常に大切な視点だと思いました。

●**林賢紀** 国際農林水産業研究センターの林です。今の定年した方のデータの話で思い出したのですが、九州大学に、1970年ぐらいの博士論文のデジタル化ができないかこちらからお願いして、電子化して向こうのリポジトリに入れていただいたという経験があります。

九州大学のOBから、「自分の持っている博士論文を電子化したいが、どうすればいいか。お金は幾らでも出す」と聞かれたので、「まず九州大学さんに相談してみますよ」と言って相談したら、九州大学に「では、うちの成果だから、うちで電子化します」と言っていただけました。判型も大きくて少し大変だったと聞きましたが、ご本人から電子化してかまわないと言ってもらえるなら、そこはさらっといけるかと思えます。確かに、研究データを抱えていて、「これ、死ぬ前に何とかしたいんですけど」というのはある話なのではないかと思って聞いていました。

倉田先生のお話のとおり、たまたま親切な図書館員がいてやってくれるのと、組織として、「電子化はわれわれのミッションだからやるのだ」という形でやるのだと、できれば後者のほうが、お願いするほうもすっきりできるのでいいなと思いました。

●**能勢** 今の定年された先生のデータで思い出したのですが、「ダークアーカイブ」という言葉を聞いたことがあります。京都大学でもダークアーカイブ用の、もう二度と上書きできない、固定したデータをずっとアーカイブしていくという試験的なものがあり、そういうものを利用できると、図書館でも定年された先生のデータを保管していけるかもしれないと思いました。

●**林和弘** NISTEP 林です。今の議論は、定年後のデータに限らず、若い人が研究対象を変える際にも起きる議論だと思っています。特に化学の世界で、私が知る限り、一つのテーマで研究できる期間がどんどん短くなっています。「ガリウムをやっています」と言えば 40 年研究できていた時代が私の大先輩のころありましたが、今は 5~10 年たったら、テーマを大きく変えなければいけません。

北海道大学のオープンサイエンスのシンポジウムでもお話ししたのですが、研究者は次の研究対象が見つかり、できるだけそちらにリソースを注力したいという性質があるので、定年後というよりは終わった研究のデータを、「またいつでも再開できるように置いておけます」「安心して管理できます」というものができる、Win-Win で、大澤さんが言うところの手をつなげる状態ができるのではないかと思います。そう言うと、大体、研究者側からも図書館側からも「それだったらいけるかもしれませんね」と言われます。

これであれば、研究者は新しいことに専念できますし、図書館は今動いている研究に対しては自分がコミットできるかどうか非常に抵抗感がありますが、終わったものであれば、終わった範囲のところで最低限のメタデータを付けて、ラッピングしてどこかに置いておくことができるなど、戦略が取れてくるのではないかという話になったことがあります。

今の倉田先生のお話をもう少し一般化して、研究が終了して次のテーマに移るときに、研究者と図書館の方が手を握れることがあるのではないかということで、指摘させていただきました。

●**能勢** そうですね。定年退職してしまうと、所属員ではないという問題が、武田先生のご指摘のようにあるかもしれませんが、いったん終わった研究の変わらないデータについて、積極的に図書館の方々にご相談してアーカイブしていただくのは、一つ今後の方向かもしれないと思いました。

他にございますか。この話に限らず、他のご質問で

も結構ですが。

●**Twitter 担当** Twitter での質問です。「研究プロジェクトに図書館員が加わるという話ですが、実際のところ、どうやってプロジェクトに必要な図書館員を見つければいいのでしょうか」。

●**倉田** 見つける見つけないというのは、あまり関係ないのではないかと思います。そういう役割が本当に認められているのであれば、逆に言えば図書館員は誰でもやらなければいけないのではないかと思います。もちろん、図書館員の中にいろいろな役をやる人がいるという体制になっていけば、その中である役割を担っている人、今で言えば、例えば Reference Librarian のような業務・サービスをやっているところに依頼が行くというイメージです。

私が思っている Embedded Librarian のようなものは全部そうです。あるサブジェクトがあったら、そのサブジェクトを図書館が受けて、誰を派遣するかはその後の話で、誰かを一本釣りにして「この人が欲しい」というイメージではあまりありません。図書館のサービスとしてやるからには、誰をどうやって見つけたいかではなくて、そういうサービスがあって、ただ申し込めば派遣してもらえるというのが、本来のサービスの在り方だと思います。

●**大澤** 私の考えとしては、研究者的な発想なので図書館員の方には受け入れにくいかもしれませんが、研究者だったら誰とでも共同研究できるかという、当然違うわけです。

それと同じように、図書館員だったら誰でもできるというわけではないと思うので、よその大学間で組めるかということは置いておいて、今日のような機会や学会で、「お互いが持っていないスキルを持っているから一緒にやりましょう」「同じような興味を持っているから、相乗効果を狙って一緒にやりましょう」「あの人はこういう技術を持っているから、力を借り

たい。一緒にやりましょう」「これだけのデータリポジトリを進めているということは、あそこの大学は目利きの人がいるに違いない。ぜひ一緒にやりませんか」という話になるのではないかと考えていました。ただ、それは非常に研究者的な発想なので、一般的に実現可能かどうかは分かりかねます。

●**能勢** 今の質問に対して、研究者の方でコメントはございますか。

●**逸村** 筑波大学の逸村です。当然、気心が知れている、この人となら一緒にやれるというのは大変重要なので、大学図書館の業務としていただくなら、管理職の方はそういうマッチングを重々考えてほしいです。また、一本釣りもないわけではないですが、そうするとその部署でのその人の立場というものもまた別途あるでしょうから、結構微妙なところですよ。やはりこれは管理職の仕事だと思います。

先ほどの服部さんの質問に戻ります。機関リポジトリの担当者が2~3年で動くのはやむを得ないのですが、単にデータを預けるだけではない話を研究者としても持ち込みたいことがあります。その際にも組織として「あの人がいなくなったから、もうこの質問は受け付けません」というのは、何とかしてほしいというのは実感としてあります。

●**能勢** 今のお話に関連したコメントなどはありますか。管理職の方、いらっしゃいますでしょうか。

この企画を立てる段階で図書館の方と話をしていると、やはり共通の疑問がありました。それが「研究者のニーズがどこにあるのか?」「大学図書館が関わり得る余地があるのか?」「そもそも研究者は図書館に関わってほしいと思っているのか?」です。今日のご講演でかなりの部分は答えが出たかもしれませんが、研究者、これに対して、私見でも結構ですので、お答えいただけるとありがたいです。

●**深貝** 横浜国立大学の深貝です。研究者のニーズは、率直に言うと、自分のテーマに都合がいいように図書館が助けてくれるという非常にわがままな話になってしまいます。図書館という機能には、サポートできることとできないことがあるわけです。それも親しい人だったらサポートして、そうでなければサポートしないというえり好みを図書館側がするわけにはもちろんいきません。そうすると、広く薄くみんなにできるサポートはあるのかというと、よく分からないのです。

ルーティンワークで図書館が動いていくようになればいいかということ、現代の学術や大学機能の変化、そして何より情報化によって、図書館の担う役割が急激に変化しているのです。今までどおりの古い図書館でもらっては困ります。そして、研究者もやはり変化の中でうろたえているのです。うろたえている人々は助けてほしいと思うけれども、自分の都合でしかうろたえていないから、非常にローカルな注文を付けてしまいます。ローカルな注文に満遍なく図書館が応えられるわけがありません。結局、非常にフォーカスされたトピックスでサンプルをつくるというのは、一つの参考にはなるとは思いますが、それをあらゆるところでできるわけではないのです。

今、データの管理の仕方については、機関リポジトリをベースにそろえましようとなっているのは、日本が世界的にも突出して機関リポジトリを既に持っているからです。この機関リポジトリが使えるということで、文部科学省のオープンサイエンスの方針ができる1年前、内閣府の報告書が上がったところで、「機関リポジトリを頼りにオープンサイエンスを進めていきましょう」と言ったから、いつの間にかオープンサイエンスが図書館の仕事になってしまったわけです。

でも、図書館がそれをいくらやっても、研究者がオープンサイエンスとは何かということを理解して、かつ知識をオープンにしたがっているかということ、どうもそうはなっていません。しつちやかめつちやかなわけです。この中で、研究者の期待をそのままともに受けて、「旧式のやり方の都合のいいことをやっつく

れ」と言う人に応える必要があるかという点、そうすると逆に図書館の変化が遅くなってしまいます。今後のことを見通した上で、図書館が次のステップにつながるようなスキームをどうつくっているかというメッセージを出していく方が先になるのではないかと思います。

ところが、これは大学によってまちまちですが、さまざまな人的配置の中で、あるいは大学の将来的な運営の見通しの中で、スタッフの数をどんどん減らさざるを得ないようなところがあります。少ない人数で図書館スタッフが切り盛りせざるを得ないとすると、一つ一つのローカルなユニットから成る図書館で、あらゆる機能の研究者の注文を受けられるかという点、そうではありません。そうすると結局、複数の図書館横断的なスキームができるような戦略を考えるということになります。機関リポジトリの横断組織にもなるようなオープンアクセスリポジトリ推進協会(JPCOAR)でできるかという点、これはやはりデータを集められるうまい仕組みをつくらうということであって、サービスの個々のものをJPCOARに持ち込んでやってもらうというわけには到底いかないわけです。

結局、その間になる中間的なプラットフォームやサービスのモデルなどをどうつくっていくか、そして、活きのいい図書館スタッフ、若手の研究者が新しい試みができるようなチャンスをどうやって開いていくかということを図書館が比較的柔軟に考えられるようになることだと思います。

手書きと謄写版印刷のカタログではない、電子的OPACをつくったような感覚がある人が、今の新しい変化の中で、どういうものをつくらなければいけないかをサジェスチョンして、変化の中で図書館が動いていくべき方向を探る、これがしばらくの課題ではないかと思います。

●**能勢** 確かにおっしゃるように、広く浅い誰にでも適用するようなサービスは、すぐにはできないと思

ます。やはり実例を何か一度やってみたいというのは、私がずっと希望していることで、JPCOARの教材の第8章に実例がもし加われば、非常にありがたいです。実例をお願いするにしても、図書館員の方がそういうことをウエルカムなのかというのは、研究者側としてはいつも気にしていたことです。それは多分、大澤先生も同じで、図書館の方にとってインセンティブがあるのかということになるわけです。

今日は実際に生の声を聞かせていただいて、非常に勇気付けられた言葉が、西菌さんからの「図書館員にとって、利用者の役に立つことは無上の喜び」だったと思います。また、JPCOARの教材の活用方法例として「研究者のコミュニケーションの下準備に」ということも挙げられていたので(図3)、図書館員の方としても受け入れてくださる余地は既にあるのではないかと考えましたが、すぐに全体に通じるようなシステムや仕組みはなかなかつくれないと思うので、このような場で、興味を持っている研究者と図書館員の方とで、何か具体例の一つつくってみたいというのが、今回改めて思ったことです。

この全体議論で、研究者への質問に対して研究者が回答したかどうか分かりませんが、私としては、企画をした人間が一番得をしたような気がしています。専修大学や京都大学といった図書館の方の生の声も聞かせていただきましたし、図書館員の方の研究データのオープン化に関わるときの心構えは、非常にオープンマインドで、「利用をしていただけるならウエル

想定される教材の活用方法例

- 図書館員をはじめとする、研究支援職の基礎知識習得に
 - 自己研修に
 - 機関が行う研修の一環として
 - 他部署間での意識共有に
 - 研究者とのコミュニケーションの下準備に
→ 機関としてのサービス構築の検討に向けた第一歩に
- 図書館等が行うリテラシー教育に：大学院生等、若手研究者向けに
- MOOC修了証を基礎スキル取得の証に？

2017/09/13

研究データ管理の組織的支援と図書館の役割について

(図3)

カム」だと捉えたのですが、間違っていたら訂正してください。研究者として、データをオープンにしていきたいという者にとっては、非常に勇気付けられました。ありがとうございました。